

京都キリスト召団 聖日集会 聖書講筵
 罪と審判・真理と自由

1987年9月20日
 奥田昌道

初めの頃の葛藤 父より賜わりたる者 挫折の時 祭りに上る 宗教の正統性の議論 安息日の癒し うわべの審き 神さまの遣わし給うた方 活ける水の流れ 姦淫の女 肉による審き 眞の審判 「にもかかわらず」働き給うさま つねにわが言におらば 眞理と自由と愛 アブラハムの子 キリストの心を心として

●初めの頃の葛藤

違うことをやり出しますと何事も初めは不自然なんです。福音の世界は、やはり我々が物心ついてから、自我に目覚めて、己れの意志で自分で計画を立て歩んできた、その歩みとぐつと異質なものが入り込んできますから、そこで闘いがあります。

「自分の中の今までのものと、集会の雰囲気、空気、集会に来て感ずるもののが、何か相違する。しかし、集会に来たい」

と言われました。そのように葛藤がありますが、初期の頃にはよくあることです。

別の事ではありますが、私が水泳をやり出しましたところ、まだ不自然なのです。私はコーチに、

「どうしても左の方の息継ぎが出来ません」と言う」と、

「それはあなたが本当に水にとけ込んで、水の中にいることが、何の違和感もなくなった時に、自然に必ず出来ますから焦らないで」

とコーチは言いました。水泳の上手な人は水の中にいることが自然なんです。水の法則にしたがって水を自由自在に操るといふか——お魚は何も考えないで泳いでいますからね——実際そのように、手をかくこと、足の動かし方、息の仕方、全てがもう自然な姿である時が一番いい。私たちは慣れない時は自分で、「ああしてこうして」と思つて、自分で上手にやっているつもりでも不自然さがあるわけです。コーチは、

「それは自然になる時が来ますよ」

と言つてくれました。ただ「自然になる時」とは練習によつて成つていくのですから、ひとりでのなるものじゃない。そこがお魚と違ふところですよ。

何事も練習の賜物たまものですが、芸術の世界もそうです。初めはきちつとデッサンを学び、いろいろ法則を学ぶ。お茶の世界でもそうですよ。全て形からきちつと教えてもらつて、そ



の形がもう形でなくなつて、とけ込んでしまった時に、今度はその人が奔放ほんぽうに絵を描いて、それが生きてくる。自由なお茶を立てて、それが生きてくる、そういう姿になるのだと思います。

そういうことでもありますので、本当に私たちの生活の中にこの福音がとけ込んで、自然な姿で無理なく歩めますように——マラソンもそうですよ、走っていることがごく自然になれば長続きいたしますが——無理をして走っていますと長続きしない。全てそうです。

●父より賜わりたる者

今日は東京キリスト召団の47周年（創立1940年）です。心から憶え、あの集会上に主の恵みが豊かであることを、先生がますますお健やかで使命を果たしてくださいるよう、本当に心から祈り願います。

こちらの集会は新しい方も見えていることですので、福音書の方に戻りますと、どうしてもヨハネ伝が心に響いてまいります。今日はヨハネ伝6章の終わりのところから見ましよう。60節から、

「⁶⁰弟子たちの中おおくの者これを聞きて言う『⁶¹こは甚はなはだしき言ことばなるかな、誰か能よく聴き得べき』⁶²イエス弟子たちの之に就きて⁶³咳せきくを自ら知りて言い給う『このことは汝おまらを躓つまずかするか。⁶⁴さらば人の子のもと居りし処ところに昇るを見ば如何に。⁶⁵活いすものは霊たまなり、肉は益する所なし、わが汝らに語りし言は、霊なり、生命いのちなり。⁶⁶されど汝らの中に信ぜぬ者どもあり』⁶⁷イエス初より、信ぜぬ者どもは誰、おのれを売る者は誰なるかを知り給えるなり。⁶⁸かくて言いたもう『この故に我われさきに汝らに告げて、父より賜わりたる者ならずば我われに來きたるを得えずと言こといしなり』」

⁶⁶ここにおいて、弟子たちのうち多くの者かえり去りて、復またイエスと共に歩まざりき。⁶⁷イエス十二弟子に言い給う『なんじらも去らんとするか』⁶⁸シモン・ペテロ答う『主よ、われら誰にゆかん、永遠の生命の言は汝にあり。⁶⁹又われらは信じかつ知る、なんじは神の聖者なり』⁷⁰イエス答え給う『われ汝ら十二人を選びしにあらずや、然るに汝らの中の一人は悪魔なり』⁷¹イエスカリオテのシモンの子ユダを指して言い給えるなり、彼は十二弟子の一人なれど、イエスを売らんとする者なり。』（ヨハネ6・60〜71）

悲劇的なことですが、前回も申しましたように、ユダ的な要素は誰にでもある。ここで弟子たちの多くの者が去って行って、再びイエスと歩まなかったとあります。それでイエスご自身も

「父より賜わりたる者ならずば我に來たるを得ずと言こといしなり」と、おつしやっている。こういう言葉を聞きますと、



「ああ自分は去って行く者なんだろうか、自分は賜りたる者なんだろうか、それとも賜っていないんだろうか？」

「主よ、私があなたから賜った者であらしめてください」

と。この砕けの姿、祈り心、それだけです。自分で自分は選ばれたる者か、そうでない者かはわかりません。決めることもできません。

●挫折の時

私の経験からしても、人間には何度か躓きがあります。もうこんなシンドイから止めようかと思ったりすることが幾度もある。

「この先生にとってもついて行けない、もう止めようか。いつそのこと、お寺へ行って、黙って座禅でも組んでいる方が自分は楽ではないだろうか」

と、そんな時が幾度かある。これは学問の世界でも、スポーツの世界でも、芸術の世界でもみな同じです。いつも壁が何度か出てくる。そんな時に、そこでそのまま去ってしまうか、

「主よ、こんな本当につまづいたりころんだり、定まらぬ者ですけれども、まことに不安定な者ですけれども、主よ、あなたの憐れみはそれに勝ちます。あなたの愛はそれに勝ちます。どうぞ助けてください。主よ、助けてください。私を憐れんでください。」

と、最後はそれなんです、難しい理屈じゃない。いろいろ努力目標をおいたり、自分でこれだけのことをこなしているこうと決めたり、そうしてやっていますと、挫折します。

「もう何もいらん、何もなくなつた。しかし、主よ憐れんでください、信なき我を憐れみ給え」

と、そこへ来たらフツと軽くなる。

「もう何もいらない、主よ憐れんでください」

と。そこでぐつと主との結びつきが、抱かれ方が強くなる。そして、また立ち上がる。だから、やはり砕けが大事です。

小池先生がよく言ってくださつたですね。

「奥田君、人間は破れだよ、砕けだよ」

と。つまり、かっこよくしなくていい、破れの姿に徹しなさい、そして砕けなさい。そうしたら主は近くいまし給うと。

集会を預ってリーダーとして引張っていくには、本当に自分自身がいろいろ辛いときもあつたわけです。集会の皆さんは、何かあれば、私に相談され、私は励まし役にまわります。私は誰のところに行ったらいいかわからないわけです。もし、集会の皆さんに打ち明けたら、



「先生を信じていたのに、先生はそんなに頼りないんですか!？」
と、弱味を見せることはできないわけです。一人悩み、そういう思いにかられたことがありました。小池先生にすら何も言えない。だけど先生は、察してか察せずしてか知りませんが、あんな時ぽつと、

「破れだよ、砕けだよ、あるがままでいいんだよ」

と、そんなことを言われたのが非常に救いになったことがありました。本当に福音書で主に愛せられている人、主の救いに、力にあずかった人はみんな投げ出して、

「助けてください。自分がこんな善い者だから救ってください」

とは絶対に言っていない。

「主よ、私を憐れんでください、私を助けてください」

という、全存在的叫び、それだけです。そういうものに対して、

「汝の信仰 汝を救えり」(マタイ9・22、マルコ5・34、10・52、ルカ7・50、

8・48、17・19、18・42)

という言葉がはねかえつて来たりしています。そんな「信仰」という立派なものじゃないけど、とにかく、「助けてください!」と全存在でしがみついた、それだけです。だから実に有り難いことなんです。

●祭りに上る

それではヨハネ伝7章にまいります。

「この後イエス、ガリラヤのうちを巡り給う、ユダヤ人の殺さんとするに因りて、ユダヤのうちを巡ることを欲し給わぬなり。」

38年苦しんでいた人を癒され救われた。それが安息日だった。そのことをユダヤ人は根にもちまして、イエスを殺そうと謀っていた。だから「ユダヤの地を巡ることを欲し給わぬなり」という。

2 ユダヤ人の仮廬かりいおの祭ちかづきたれば、3 兄弟たちイエスに言う『なんじの行わざ業を弟子たちにも見せんために、此処を去りてユダヤに往け。4 誰にても

自ら顕ひそれんことを求めて、隠ひそに業をなす者なし。汝これらの事を為すからには、

己を世にあらわせ』

この兄弟は肉の兄弟たちですね、肉親です。北のガリラヤ地方からユダヤの——当時でいえば都会、宗教の中心地です——そのユダヤ・エルサレムに行けと。「みんな自分を売り込むじゃないか、あなたも行って来なさい」と兄弟たちが言ったわけです。

5 是その兄弟たちもイエスを信ぜぬ故なり。6 ここにイエス言い給う『わが時はいまだ到らず、汝らの時は常に備れり。7 世は汝らを憎むこと能わねど我を憎む、我は世の所作しわざの悪しきあかしを証すればなり。8 なんじら祭に上れ、わが



時いまだ満たねば、我は今この祭にのぼらず』⁹ かく言いて尚ガリラヤに留り給う。

いろんな祭りがあつたり、宗教的行事があつても、それを支配している空気は決して主キリストから見た時に、本当に神さまの前の碎けの姿ではない。偽善が満ちている。肉的なものがいっぱいこつている。人々はそこで喜んだり、ワシヨイワシヨイやっているけれども、それは神さまのみ心から遠いこと甚だしい。イエスは嘆いておられる。だから祭りに上られない。

¹⁰ 而して兄弟たちの祭にのぼりたる後、あらわならで潜びやかに上り給う。

¹¹ 祭にあたりユダヤ人らイエスを尋ねて『かれは何処に居るか』と言う。¹² また群衆のうちに囁く者おおくありて、或は『イエスは善き人なり』といい、或は『いな、群衆を感すなり』と言う。¹³ されどユダヤ人を懼るるに因りて、誰もイエスのことを公然に言わず。』(ヨハネ7・1〜13)

イエスはこつそりと上られる。イエスのことが話題になつていているわけです。いろんな評判が行き交つている。しかし、みんなひそひそ話をしている。

● 宗教の正統性の議論

「¹⁴ 祭も、はや半となりし頃、イエス宮にのぼりて教え給えば、¹⁵ ユダヤ人あやしみて言う『この人は学びし事なきに、如何にして書を知るか』」

イエスはいわゆる正統的な宗教教育を受けておられない。ユダヤ人の宗教の学校の方にも行つておられない。それなのにすばらしいと。

¹⁶ イエス答えて言い給う『わが教はわが教にあらず、我を遣し給いし者の教なり。¹⁷ 人もし御意を行わんと欲せば、此の教の神よりか、我が己より語るかを知らん。』(ヨハネ7・14〜17)

この言葉にどうぞ注目してください。宗教の正統性について議論はいらぬ。キリスト教のことについてはいろんな疑問をもつ人がありましたら、それをいちいち弁明して論証することはありません。この言葉で答えてあげてください。キリストの語つておられることに虚心坦懐に耳を傾けてください。そしたらキリストのお語りになつていくことが、神から出たものか、あるいは人から出たものか、自ずとわかるはずですよ。それ以外の証明はありません。私はこの言葉に本当にうたれますし、また非常に嬉しく思います。

あなたが本当にみ心を行おう、神さまのみ心にそおうと、その気持ちでキリストの言葉にぶつかってください。批判する気持ちで、神さまのみ心を行わないで、神さまに敵対しようという気持ちでキリストの言葉を読んだつて絶対にわからない。物理学とは違うんだから。

本当に心根が神さまのみ心にそおうという——神さまを見たこともない、どんなお方か



も知らない。しかし、もしいらつしやるとしたら——その神さまのみにそいたいという気持ちで、キリストの語られてきたこと、なきつたこと、それを虚心につらつらと眺めて、その時に心に、「はっ、これはちがう！」と響いてきたらいいし、そうでなければ、まだ時は来ていない。

私たちは人に説教して、人の心をひるがえ翻すことはできません。神さまの霊がその人の心をとらえてくださらなければなりません。

パウロがピリピの方に伝道した時、河原の祈り場を捜して河のほとりで祈っていた。そうしたら、そこに婦人たちが幾人かいて、その中にルデヤという紫布の商人の奥さんがいて、主はルデヤの心を開き給うた。そこでルデヤはパウロの言葉に耳を傾けて、そしてルデヤは救われた。そこでは何人かの人が聞いていたでしょう。しかし、ルデヤの心が開かれて、ルデヤは主を信じた。きつと、ルデヤは

「神さまのみ心を知りたい、み心を行いたい、本当にこれだというものを示されたら、それに従いたい」

という、その気持ちがあつたんだと思います。そういう者に対しては、神さまは心を開いてくださる（使徒行伝16・12〜15）。

●安息日の癒し

「17人もし御意を行わんと欲せば、此の教の神よりか、我が己より語るかを知らん。18己より語るものは己の栄光をもとむ、己を遣しし者の栄光を求むる者は真なり、その中に不義なし。19モーセは汝らに律法を与えしにあらずや、されど汝等のうちに律法を守る者なし。汝ら何ゆえ我を殺さんとするか」

つまり、自分に栄光を帰する、自分を売り込む、自分の名誉を求める、これは偽りだ。己ではなくて、遣わし給うた神さま、その方のみ心、その方の栄光、その方に栄光を帰する、この碎けのあり方、無私のあり方、私なき姿、それが本当だよと。

「あなた方はモーセ、モーセと言っているけど、モーセの心、モーセの律法の心、それをつか把んでいないではないか。もし本当にモーセの心をつかんでいたら、どうして私を責め、私を殺そうと謀るのか」

と、そうおっしゃいました。

20 群衆こたう『なんじは悪鬼に憑かれたり、誰が汝を殺さんとするぞ』21 イ

エス答えて言い給う『われ一つの業をなしたれば、汝等みな怪しめり。22 モ

ーセは汝らに割礼を命じたり（これはモーセより起りしとにあらず、先祖より起

りしなり）この故に汝ら安息日にも人に割礼を施す。23 モーセの律法の廃らぬ

ために、安息日に人の割礼を受くる事あらば、何ぞ安息日に人の全身を健か

にせしとて我を怒るか。』（ヨハネ7・17〜23）



38年間のあの病の人を癒された業、あのひとつの業、これがどこまでも引つかかっているわけです。割礼を命じたのは実はモーセではなく、アブラハムから始まっている。アブラハムとの契約を神さまが結ばれて、そして「契約の民であるぞ」と、その証として割礼をお命じになった。モーセはそれを受け継いだわけです。モーセが命じたということで、人々は墨守して割礼を施していた。

安息日だからといって割礼をやめない。生まれて八日目と決まっていますから、生まれた日によっては割礼を施すべき日が安息日に当たりますよ。もしたら安息日でもちゃんと割礼を施す。だから、安息日に病める人にぶつかって、神さまの愛が働いて、み力が働いて、そして人が癒される、それがみ心ではないかと。安息日の割礼がみ心ならば、もっと安息日に人の全身を健やかにする、神さまの愛の発露、これは本当にみ心にかなうではないか、どうして私を怒るか。

●うわべの審き

「²⁴うわべの外貌によりて裁くな、正しき審判にて審き^{さばき}」²⁵ここにエルサレムの或人々^{ある}いう『これは人々の殺さんとする者ならずや。²⁶視よ、公然に語るに、之に對して何を言う者なし、^{つかさ}司たちは此の人のキリストたるを真に認めしならんか。²⁷されど我らは此の人の何処よりかを知る、キリストの来る時には、その何処よりかを知る者なし』(ヨハネ7・24〜27)

世の中にはうわべの審きが何と多いことでしょうか。彼らは聖書をものすごく調べて、歴史学者みたいです。だから、

「キリストはベツレヘムに生まれ、ナザレの出身でと素性はみな分っている。本当のキリストならわからないはずだ、旧約聖書を調べたらそう書いてある」

と。何かそういう形でことごとくに旧約聖書の記述とイエスの姿、生い立ちとを照らし合わせ、「これは本当だ、いやこれは違う」ということをやっている。まさにうわべで審いているわけです。

「キリストが来る前にはもう一度エリヤがやってくる。まだ、エリヤは来ていないのだから、ひよつとしたら、このキリストという方はエリヤかな?」

と言ってみたり、昔の預言されたところに何とかあてはめてみて、それで自分を納得させようとする。イエス・キリストご自身を一人のはだかの魂として先入観なしに、「主イエス・キリスト」として受けとれないわけです。すべて先にそういう物差しがあつて、その物差しを自分で解釈して、それにあてはめている。だからキリストは言われたでしょ。

「あなたがたは聖書の中に永遠の生命があると思つて調べている。しかし、この聖書は私のことを証しているんだ。ところが、私の処へあなたがたは来ようとしなさい、私を信じようとしなさい、むしろ、私を聖書によつて審こうとし



ている。それではだめだ。」(ヨハネ5・39〜40)
と言われた。直々に見えざる霊のキリストにぶつかって、主さまに呼びかけ、

「助けてくださいー!」

と叫び、そして、救いを体験し、聖霊を授かって、いよいよ主の中へ深く導かれてゆく、いよいよ一つにされてゆく、体で受けとってゆく。その積み重ね、その中から聖書を受けとる。そうすると生きてきます。そうではなくて、外側から、外側の基準でイエスのことをいろいろと言っていたのでは、絶対に扉は聞かれない。そういうことですね。

● 神さまの遣わし給うた方

「²⁸ここにイエス宮にて教えつつ呼わりて言い給う『なんじら我を知り、亦わが何処よりかを知る。されど我は己より来るにあらず、真の者ありて我を遣し給えり。汝らは彼を知らず、²⁹我は彼を知る。我は彼より出で、彼は我を遣し給いしに因りてなり』」

つまり肉的に、

「どうやって生まれ、どういう育ちだということ、あなたがたは確かに知っている。それは肉のことだ。本当は私は神さまから、天から降ってきた。真なるお方が私をお遣わしになった。」

これは秘密なんですね。

汝らは真なるお方を知らない。私は知っている。私はその方から出てきた。その方が私をお遣わしになったのだから」

と。私たちはそのことを心から信じています。イエスこそは神さまの遣わし給うた方。栄光の座を棄てて、我らと等しき姿にてこの世の苦しみを味わい、我らの悲しみを担い、本当に人らしき人として歩み給うた。その方が救主である、その方が天地万物の創り主なるお方の具現であると。実に不思議な神さまのそういうみ心を私たちは知らしめられて信じました。

³³イエス言い給う『我なお暫く汝らと偕に居り、而してのち我を遣し給いし者の御許に往く。³⁴汝ら我を尋ねん、されど逢わざるべし、汝等わが居る処に往くこと能わず』(ヨハネ7・28〜34)

「いつまでもここに居ないよ」と言われ、天にまた帰り給うということ言われたのですけれども、「いったい何を言っているんだろうか?」と、ユダヤ人にはそのことがわからなかった。

● 活ける水の流れ

「³⁷祭の終の大なる日に、イエス立ちて呼わりて言いたもう『人もし渴かば



我に來りて飲め。38我を信する者は、聖書に云えるごとく、その腹より活ける水、川となりて流れ出づべし』39これは彼を信する者の受けんとする御靈を指して言い給いしなり。」(ヨハネ7・37〜39)

これは決定的な言葉ですね。6章では、

「我を喰らい、我を飲め。私を食べる者、我が肉を喰らい我が血を飲む者は永遠に死なず。永遠の生命を受ける、終わりの日に我これをよみがえ甦らすべし」

とおっしゃいました。今度は、

「渇きがあるなら、私の処に来て存分に飲みなさい」

とおっしゃいました。「食べる、飲め」とか、これはこういう表現でおっしゃるしか仕方がなかったから、そうおっしゃいました。

「私を本当に信じ受けとる者、体の中に私が入れば、その人のお腹の中から泉が溢れて、川となつて流れ出る。」

と、これは聖靈のことを指して言われた。イエスご自身には聖靈は豊かに来ていましたけれども、あがないわざ贖の業が済んでいませんから、人々にはまだ降っていない。だから、やがて時が満つれば、そういう聖靈が与えられる。ペンテコステ以降のことを指してここで言われています。

あの黙示録には、

「神の都の真ん中を川が流れている。その川のほとりには十二種の樹々が植わ

つていて、月々に実を結んで人々を癒す」(黙示録22・1〜2)

とあります。川の水、豊かに清らけく流れている川というのは、本当に私たちの心を潤うるおします。また、山の川なんていうのは清らかですから、私たちはそこから存分に飲むことができます。そのように今度は、私たち自身から泉が溢れて川となつて流れ出て、人々を潤す、人々を活かしめる存在に私たちは変えられてゆく。

私たちが意図的に人を救おうだとか、そういうことを思わなくても、本当にその人のことを思い、その人の最善を願っていけば、その祈りは自ずと川の流れとなつて、その人を活かさざるを得ない。これは神の業わざなんです。自分の業じゃない。私たちは常に、人に出逢ったとき、その人にとって何が一番プラスなのか、何が幸いなのか、そのことを私たちは察して、そしてそのことを祈り、その成ることを願っていく。自分に求めることは何一つないんです、その人に良かれということを願う。

「人にして欲しいと思うことを人にせよ、これが律法なり、預言者なり。全旧

約聖書である、旧約聖書はそのような愛である」

と。さすがにイエス・キリストはあの旧約聖書をそんなふうを受けとられた(マタイ7・12、22・40、ロマ13・10)。だから、一人一人において今その人に必要なことが、

「願わくば、そのことがその人の永遠の生命につながるように。試練の中にある友



ならば、その試練を通して彼をあなたの生命の世界へどうぞ導き入れてください。試練をその一つのきつかけとしてください。病んでいる方ならば、その病の軽からんことを、癒されんことを。しかし、その病を通して、あなたのご愛を知ることができますように。」

と、その気持ちで祈り、また励ますことです。私たちの業じゃなくて、私たちの中から活ける水が流れ出て人を癒していく、そのことをどうぞ信じてください。

●姦淫の女

それから今度はヨハネ福音書の8章にゆきます。聖書は本当にドラマチックですから、前にも言いましたように、各章のはじめに出来事が出てきて、それに因むことが人々との問答という形で出てきます。ドラマチックにヨハネ伝は出来上がっています。

8章の最初のところは実はずっと終わりの方にあるべきなんです。エルサレムにすでに入っておられたので、ルカ伝では20章くらいのところに出てくるべき記事です。それをここへもってきてある。だから、7章の終わりの53節から8章の11節まで括弧に入っています。挿入されているわけです。しかし、8章にとつては大事な導入部になっています。

「イエス、オリブ山にゆき給う。²夜明ごろ、また宮に入りしに、民みな御許に來りたれば、坐して教え給う。³ここに学者・パリサイ人ら、姦淫のとき捕えられたる女を連れきたり、真中に立ててイエスに言う、

夜明け頃でありますのに、「民みな御許に來たりたれば」と、中々熱心ですね。学者、パリサイ人らは意図的に、人がイエスの教えを聞いている場に、姦淫の現場の女を捕らえて引きずり出してきた。イエスを困らせてやろうという悪意にみちています。

⁴『師よ、この女は姦淫のおり、そのまま捕えられたるなり。⁵モーセは律法に、斯かる者を石にて撃つべき事を我らに命じたるが、汝は如何に言うか』

「もし、モーセと異なることをおっしゃったら口ではおきませんよ。モーセの律法をあなたが本当に大事になさるなら、その通りになさっていただきたいですね」と、このように非常に悪意にみちています。

⁶かく云えるは、イエスを試みて、訴うる種を得んとてなり。イエス身を屈め、指にて地に物書き給う。

正面から応じられない、かわしておられます。

⁷かれら問いて止まざれば、イエス身を起して『なんじらの中、罪なき者ま
ず石を擲て』⁸と言ひ、また身を屈めて地に物書きたまう。⁹彼等これを聞き
て良心に責められ、老人をはじめ若き者まで一人一人いでゆき、唯イエスと
中に立てる女とのみ遺れり。¹⁰イエス身を起して、女のほかに誰も居らぬを
見て言い給う『おんなよ、汝を訴えたる者どもは何処におるぞ、汝を罪する



者

すなわち、断罪して罰する者、

なきか』¹¹女いう『主よ、誰もなし』イエス言い給う『われも汝を罪せじ、
往け、この後ふたたび罪を犯すな』(ヨハネ8・11)

●肉による審き

「¹²かくてイエスマた人々に語りて言い給う『われは世の光なり、我に従う者は暗き中を歩まず、生命の光を得べし』¹³パリサイ人ら言う『なんじは已につきて証す、なんじの証は真ならず』¹⁴イエス答えて言い給う『われ自ら己につきて証すとも、我が証は真なり、我は何処より来り何処に往くを知る故なり。』

これは霊的なことですね。肉的な出自ではなくて、「神から来て神に帰る」という、この霊の世界のことです。

汝らは何処より来り、何処に往くを知らず、¹⁵なんじらは肉によりて審く、

我は誰をも審かず。」(ヨハネ8・12～14)

彼らは一生懸命にイエスに審かせようとしている。もちろん、彼らは心の中で審かいています。そして、イエスに審かせようとしている。姦淫は罪である。罪をはつきり定め、審きを求めている。しかし、イエスはそれにお答えになっていない。身を屈めて、地に物を書いておられた。激しく迫ってきて、最後までキリストは耐えておられた。とうとう最後に立ち上がって、

「罪なき者まず石を擲て」

と、ひとこと言って、また屈みこんでしまわれた。

「いったい罪を審けるような者がいるのか、そんな資格がお前たちにあるのか。私にもないんだよ」

と、イエスは言っておられるんです。罪の赦しを求め、

「父よ罪を赦し給え、我らに咎、負債ある者を我ら赦したる如く、我らの負債をも免し給え」(マタイ5・12)

と、これしか人の姿はないと。それを、自分のことはさておいて、人の罪をとやかく言う。おのが目に梁木があるのに、人の目のゴミを除かせろと言う。そういう人の偽善の姿、思いついた姿に対してこそ、イエスは憤っておられるんです。人間の何たるかをよく知っておられる。

「自分自身が神さまの前に立てない存在じゃないか。それをよくもまあ、お前は人のことにまで手を出すゆとりがあるんだね、自分自身はどうなっているんだ」

と、そのことをイエスは言っておられるのだと思います。自分が罪ある者であることを認



めるならば、本当に神から遣わされたこの救い主、このお方にすがらないではいられないじゃないかと。

「私は自分で救い主になったんじゃない。私は神さまに遣わされて、このような、みんな罪を有^もつている中に、自分でどうにもできないでいる者の罪を根こそぎにするために私は遣わされた。十字架が待っている。そこで私は罪を負う。あなた方は、私の中にある光を——これは神さまの光が光っている——神さまの生命がお前たちに与えられようとしているのに、どうしてこれを黙って受けようとしてくれないんだ。」

と、そういう嘆きが主のお心だと思っんです。

「われも汝を罪せじ、往け、ふたたび罪を犯すな」

と言われた。罪を犯さしめようとする力、そういうサタンの力、我々の肉の中にひそむ衝動、そういうたものを自分でどうにもコントロールできない。しかし、それをなお引っくり返りして、神さまの力に貫かれて、神の子として歩ましめてくださる。

「この絶大なる神の本願力、それにすがろうではないか。それを信じて、その方にすがって、歩もうじゃないか」

と。だから「汝らは肉によりて審く」というのは、そういうことですね。

「我は誰をも審かず」

と。キリストは審こうとなさらない。

●真の審判

「¹⁶されど我もし審かば、我が審判^{さばき}は真^{まこと}なり、

イエスは積極的に審こうとなさらない。

「イエスという救い主がいらつしやるのに、この尊き救いを無視する人は自分で自分を審いている。自分で自分を地獄へ追いやるんだ」

ということなんです。これは21節から見てくださいればよくわかります。

²¹かくてまた人々に言い給う『われ往く、なんじら我を尋ねん。されど己が罪のうちに死なん、わが往くところに汝ら来ること能わず』

いま二つの物体が出会わんとしています。しかし、すれ違ってそれてしまう。そうすると、「もうこれでお終いだよ、私はまた天に昇ってゆく」と。天から降ってきた放物線が、地を救い上げようとして、そしてまた天に昇ってゆく。その救いの放物線がやって来た。その時に、この救いの放物線に乗った者は一緒に天に昇らせていただけのけれども、これを捨てた人はもうどうにもならんよと。

「なんじら我を尋ねん。されど己が罪のうちに死なん、わが往くところに汝ら来ること能わず」



と。それから今日、読んでいただいた処に入ります。「わが往くところに来たらず、とはいったい何処へ行こうとしているんだ？」と。

23 イエス言い給う『なんじらは下より出で、我は上より出づ、汝らは此の世より出で、我は此の世より出でず。』

地から出でし者、肉によりて生まれたまんまの人、土から出た者は土に帰るのと同じように、天から降りし者、神から出でし者は神に帰る。

24 之によりて我なんじらは己が罪のうちに死なんと云えるなり。汝等もし我の夫なるを信ぜずば、罪のうちに死ぬべし』

神から遣わされた救い主だということを、それをあなた方が受けとらないならば、罪のうちに死ぬべし。これが審判だよ。人の罪を云々しているようなゆとりがあるのかねと。

『なんじらは下より出で、我は上より出づ、汝らは此の世より出で、我は此の世より出でず。24 之によりて我なんじらは己が罪のうちに死なんと云えるなり。汝等もし我の夫なるを信ぜずば、罪のうちに死ぬべし』(ヨハネ8・16)

この「信ぜずば」というのは、これと逆の「信ずる」ということは「受けとる」ということです。具体的に自分の中に迎え入れる。主イエス・キリストを我が内に迎え入れる。一つになっていただく。そうでなければ、そのまんま死んでしまう。罪のうちに死んでしまう。「罪の払う価は死なり」と、これが審判だと言う。

●「にもかかわらず」働き給う主さま

「28 ここにイエス言い給う『なんじら人の子を挙げしもの、これは十字架とご復活を指しています。』

我の夫なるを知り、又わが己によりて何事をも為さず、ただ父の我に教え給いしごとく、此等のことを語りたるを知らん。29 我を遣し給いし者は、我とともに在す。我つねに御意に適うことを行うによりて、我を独おき給わず』(ヨハネ8・28～29)

先ほど、

「み心にかなうことを求めて、私のことばを聞くならば、それが神からのものか、人からのものかが分かるよ」

とおっしゃった。今度は主ご自身が、

「私はいつも父のみ心を求め、み心にかなうことを行っているから、決して神さまはお捨てにならない、いつも一緒にいてくださる」

とおっしゃいました。みな事実であり、実践です。理論じゃありません。だから、私たちクリスチャンの証というものも、言葉ではなくて、このイエスのおことばのように、



「私はいつもみ心になうことを行っていますから、主イエスは私を決してお捨てになりません」

と、本当に胸を張ってそう言いたいものです。まあ、「み心を行っていますから」なんて、口はぼつたいたいことはとても言えませんが、私はイエスにいつもしがみついていますから、主はいつも私を抱いて、私と一緒にいてくださいます。だから、私の祈りをあなたが受けてくださるなら、主は働き給います。「われ汝らを遣わさん」とおっしゃってくださいいたから。

「いや、『私のような者なんか』と言うな。私はお前を贖ったじゃないか、お前はすでに潔い」

「こんなだらしのない者でも、主さま、そんなふうに仰ってくださいるんですか」

「もうだらしのないことはわかっている。そんなものはそう簡単に治るもんじやない。

『土の器に宝をもてり』とパウロも言っているじゃないか。宝が大事なんだ、器じやない。器が磨いてあるか磨いてないかじやない。中に入っている宝が大事なんだ。それは私だ。くやしければ、器を磨いてもいいけれど、それが本質的なことじやない。私がお前と一緒にいる。お前を通して働く。神の栄光が顕われる。それがみ心なんだよ」

「はい、それじゃ、どうぞみ心どおりにしてください。ついながら、潔めてください。私のこの土の器を、できることなら、銀の器に、さらに金の器にしてください。私も光りとうございます。蛍だつて光っているじゃありませんか」

「じゃあ、私は世の光だから、私の中にいなさい、私がお前の光となるから」と。まあまあ、冗談っぽく言いましたけれども、そんなものだと思うんです。

自分が完全になったら、神さまが働けるんじゃない。神さまは、にもかかわらず、働き給う。「にもかかわらず」というところに福音のすばらしさがあるんです。大事なことは、

「にもかかわらず、主は働き、救い給う。これ本願なり」

ということですよ。「にもかかわらず」にいつまでも甘えていたら勿論よくはありませんけれども、

「主よどうぞみ心を」

と、いよいよ主にすがつてゆくことです。

夏の終わりから若王子にやくおうじの祈りを復活しまして、本当に何か日曜すがすがごとに清々しい思いでも嬉しい。やはり違いますね、特に今日なんて本当にすばらしい秋晴れでした。

「京都キリスト召団は不滅です」

なんて、そんなことを思いながら、山の祈りができることは本当に嬉しい。私たちは山で祈っているのだから8時から8時半の間です。どうぞ皆さん、ご家庭でもそのことを憶おぼえてください。あるいは、ここへいらつしやる道すがら憶えてください。少しでも



長く、冬になってもということですが、京都召団のいつも活力の源ですから、山の祈りが護られますよう、皆さん祈ってください。

●つねにわが言におらば

それでは、次は31節、

「31ここにイエス已を信じたるユダヤ人に言いたもう『汝等もし常に我が言に

居らば、真にわが弟子なり。』」（ヨハネ8・31）

私たちの信仰にとつて大事なのはやはり主イエス・キリストの言、キリストのことばです。人の語る言葉もそうですね、

「あの人はこう言ってくれた。だからその言葉を信じ、その言葉に自分を賭けています」

という。人を信ずるとは、その人の言葉を誠として受けとつていくという面が非常に大事です。いわんや、キリストが我々に約束してくださいましたおことば、自分がそれにどんなにふさわしくないように思えようと、そのおことばに自分を賭けてゆく、託してゆく、ことばに乗ってゆくと。これが、自分の頭でつくり出した信仰とか、何か言い伝えだとか、何とはなしにあそこは神々しいという、そういう感情に依存する信仰ではなくて、本当の理性的な、正しい意味での理性的な信仰です。

親鸞でしたか、何か迫害を受けて島流しにあうようなその時に、お弟子に対して、

「恋しくば、南無阿弥陀仏を称えみよ、この六文字に我は居るなり」

と、そういう歌を別れに際して与えたということを、小池先生から聞きました。

「別れは寂しく恋しい。私のことが恋しくなったら、南無阿弥陀仏とあなたは称えるがいい、南無阿弥陀仏ということばの中に、実は私は居るんだから」

と。そのくらい、やはり「南無阿弥陀仏」というそのことばを親鸞が称えるとき、それはいわゆる「お念仏」じゃない。

「称えることにそこに生命が来る」

という、そういう角度で称えたんです。

私はそれで感動しますのは、やはり小池先生がああ、

「恵福なるかな霊の貧しき者、天国はその人のものなり」（マタイ5・3）

と、あそここの話をなさる時、何回お話しなさろうと、そのことばを話されている時、本当に異言状態になられるという、ああいうお姿に感動いたします。マンネリは無いということとです。

「いつもその中から自分は告白しているんだ」とおっしゃる。

「恵福なるかな汝、わが十字架によりて根底より、すでに霊貧しくされた者よ、我



が十字架によりて霊貧しくされた汝よ、復活の我、聖霊の我、汝の中にあり。」

と。それが「恵福なるぞ」(召団讃歌A47)の歌の第一歌になつて表れました。

「恵福なるぞ 汝が霊は
わが十字架に あがなわれ
無の貧しさに 澄む 堇

汝のものよ 天国は」(歌調「美しき天然」)

根底において澄みきつてしまつていゝるんですね。

「汝のものよ、われなる天国は。私——イエスという天国——はお前の中にいるよ」と。さっきの力まない姿、自然なる姿、その根底をなすものはこの「無者」の姿です。主はもうすべて私という者を贖いとしてくださった。

「私は根源的に、根底において何も心配いらぬ、全部托しました。キリストは全部引き上げてくださいました。その代り無条件に、主さま、あなたのおことばに、ご命令に従つてゆきます。捨てられない自分を、あなたは捨ててくださいだったので。あなたのご自分を捨て給うた時に、私自身も一緒に捨てられました。そのことを信じます。私は無者とされました。そのことを信じます。だから、あなたのみ心通りに、どうぞ何処へなりともお連れください。あなたとこれからいつも一緒にいられる運命共同体、このことを本当に幸せに思い、光榮に思います。どうぞ、いつもみ心にならざるように導いてください。」

と。これが
「常にわが言に居らば、誠にわが弟子なり」

ということですよ。私たちはキリストの弟子であることを誇りにいたします。

●真理と自由と愛

「³²また真理を知らん、而して真理は汝らに自由を得さすべし」(ヨハネ

8・32)

実に有り難いことです。このキリストという真理——客観的に真理とは何ですかというのじゃなくて——キリストご自身の存在が真理なんです。

キリストというこの真理の具現、このお方を知れば知るほど、あなた方は本当に自由になる。我々はもう本当に心から自由というものにあこがれています。さっきの「無」ということと「自由」はまた通じている。何ものにも縛られていない。秋空のように澄みきつて、何のさまたげもない、そういう自由。この生命の質は、生命が求めているのは自由です。その本当の自由の貫かれているところ、そこに愛が湧きあふれます。聖霊の生命は自由であり、そして愛なんです。

そういう我々の求めて止まないもの、これを主は私たちに下さる。だから、先ほどの「罪



と審判^{さばき}、罪と死、これは人間の不自由な姿でしよ。我々の肉なる姿は罪と死という審判の姿。罪のもたらす結果は死である。そのこと自体が審判だという、その中に留まっていることが審判だという。

それをキリストに贖われ、救われますと、そこに宿るキリストという「真理」は私たちを「自由」にし、そしてそこに生命を与え、永遠の生命——その質は愛です——こういうところに私たちをもたらししてください。これが救いなんです。

● アブラハムの子

このように

「真理は自由を得さすべし」

とおっしゃったものですから、自由というと、反対は拘束であり、奴隷なんです。奴隷は自分の意志をもてません。意に反していろんなことを強制されます。彼らは、

「いや自分たちは自由ですよ、奴隷になったことは一度もありません。先祖は昔、エジプトで奴隷になったことがありました。しかし、私たちは自由です」

と。それに対してイエスはおっしゃった。

「³⁴イエス答え給う『まことに誠に汝らに告ぐ、すべて罪を犯す者は罪の奴隷なり。』

アルコール依存症も、アルコールの奴隷になってしまふ。だからやはり、気をつけないといけません。タバコを止められない人はタバコの奴隷なんです。自分で逃れようとしても逃れられない。

³⁵奴隷はどこしえに家に居らず、子は永遠に居るなり。³⁶この故に子もし汝らに自由を得させば、汝ら實に自由とならん。³⁷我は汝らがアブラハムの裔^{すえ}なるを知る、されど我が言なんじらの衷^{うち}に留らぬ故に、我を殺さんと謀^{はか}る。」(ヨハネ8・34〜37)

このたとえで言いますと、「家」というものの中には自由がある。「家の子」は自由だが、「奴隷」はその外に居ると。ご自分のことを「子」と言われているんです。

「本当の自由を与えるのは私だ。私は汝らがアブラハムの裔^{すえ}であることを知っている。しかし、あなた方は私を信じようとしなから、私を殺そうと謀る。自分の本質というものをよく知るがいい。」

「自分たちはアブラハムの子だ」と彼らは言います。

アブラハムの本当の子供ならば、アブラハムの業^{わざ}をしてごらん。アブラハムは私を殺そうなんて決して思わない。むしろ、私の日を見よう見ようとしていた。今きつと喜んでいるだろう。しかし、あなた方は、上辺はアブラハムの子だと言いなから私を殺そうと謀っている。それは、結局はアブラハムの



子でなくて、お前たちは悪魔の子だ。悪魔から出て悪魔の業を行う。お前たちの父は悪魔であり、悪魔の欲は人を殺すことだ。本質は虚偽だ、偽りだ」と、はつきり厳しくおっしゃいました。

「私は神さまから出てきた。だから神のことばを語っている。あなた方が私に聞こうとしないのは、結局は神から出てきていない。悪魔から出てきているから、私を受けようとしても、私を受けとれないんだ。」

と、ずばりおっしゃった。51節に、

『51誠にもことに汝らに告ぐ、人もし我が言を守らば、永遠に死を見ざるべし』

また問答がありますが、くだらない問答を人々はやっています。56節、面白いですよ。

56 汝らの父アブラハムは、我が日を見んとて楽しみ且これを見て喜べり』57ユ

ダヤ人いう『なんじ未だ五十歳にもならぬにアブラハムを見しか』58 イエス

言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、アブラハムの生れいでぬ前より我は在

るなり』(ヨハネ8・51〜58)

永遠の昔より、父のみ元におられたイエス、

「万物はイエスのことばによって、神の子のことばによって生まれた」

とありますように、そういう本質的な意味ではアブラハムはうんと後です。肉の姿をとって顕れられたのはアブラハムよりうんと後ですけれど、しかし、本質的に昔より永遠にいましたしそのお方、これはアブラハムより前ですから、こういうことをおっしゃったわけです。

「アブラハムは私を見て喜んでるよ」

と。これは「天界のアブラハムが私のことをきつと喜んでるよ」とおっしゃったんだと思います。まあどちらにしても、彼らとは全然次元が違います。

●キリストの心を心として

それで、浮き彫りになってきましたことは、さつきから言っていますように、キリストは誰をも審こうとしておられない。実は自分で自分を審いている。この尊い福音がこのようにしてもたらされたのに、その自分の傲慢とか、思ひ上がり、頭が高い、神さまの前に平伏さない。そのことによって、

「この尊い救いをしりぞけているなら、そのことがあなた方にとって審判となる。

お前たちは罪のうちに死ぬ。私は天に取り去られる。もう遅いよ。だから、悔い

改めよ」

とおっしゃったのはそのことです。心を翻して、古き我を捨てて、誰でも本当に心の底から、

「主よ助けてください。この罪深き私を赦してください、救ってください!」

と、そう全存在で叫ぶ者をキリストは誰ひとり拒まれぬ。さつき「弟子たちは去って行った」とありましたけれども、去って行ってまた帰って来たら、キリストは受け入れられ



ますよ。何度も人は躓つまずくんですもの。いつでも本当に本心に立ち返って、放蕩息子のよう
に帰って来たら、キリストはいつでもお迎えくださる。この「碎けの姿をいただくかどうか」
それにかかっています。

だから、私たちも決して人を審きません。ただただ、本当にキリストに立ち帰っていた
だきたい。そのことを告白します。そういう意味において、全てをキリストに委ねます。

「¹⁶我には亦この檻おりのものならぬ他の羊あり、之をも導かざるを得ず、彼らは

我が声をきかん、遂に一つの群むれひとりの牧者ひつじかひとなるべし。」(ヨハネ10・16)

そういう事態が成ることを私は本当に祈っていると、ヨハネ伝10章でおっしゃっていま
す。そういうキリストの心を我々は心として、

「どうぞ、あなたのその熱きみ心が成りますように」

と、そういう祈りで貫きたい、貫かれたいと思っております。

それではお話はこれで終わりとして、ご一緒に祈ります。

(森下一男主筆「ともしび」誌第273〜297号1993/7/25〜10/10より転載)

